

佐々木現順 著『基本パーリ語文法』
野々目了

香川孝雄

パーリ語の文法書として、わが国では

立花俊道 巴利語文典 明治四十三年

長井真琴 独習巴利語文法 昭和五年

水野弘元 パーリ語文法 昭和三十年

の三種がすでに出版されており、海外では

E. Muller: A Simplified Grammar of the Pali Language, 1884

Ch. Duroiselle: A Practical Grammar of the Pali Language, 1906

Nyānatiloka: Kleine Systematische Pāli Grammatik, 1910

W. Geiger: Pāli, Literatur und Sprache, 1916

C. V. Joshi: A Manual of Pāli, 1949

Mayrhofer: Handbuch des Pāli, 2 Bde, 1951

A. K. Warder: Introduction to Pāli, 1967

その他にも、いくつかの文法書があるが、講義用の教科書と

して使用するとすると、外国のテキストはすでに絶版のものが多く上に、かりに入手できるものでも、受講者の冊数を揃えるのに注文してから到着するまでの時間がかかりすぎて講義の間に合わない。日本のものでは、立花氏の文典は、絶版であつて手に入らず、長井氏のものとは昭和二十九年に写真版で再版されたが、これとて出版以来、半世紀近くを経過して、その間にパーリ語学も大いに進展してきているのみならず、旧漢字、旧仮名づかいで書かれているために、学生諸君には、いかにも親しみにくいという感じは否定できなかった。その翌年、水野弘元博士の文法書が出版され、われわれはそれに跳びついたのである。その内容は懇切丁寧に初歩的学習者から専門的研究を志すものに至るまでのよき指南となるように配慮されていて私どもも大いに恩恵を受けたものである。しかしこれを教科書として使用するとすると、まず値が張り過ぎること、内容があまりにも詳細に述べられているために、初歩的学習者にはかえって煩雑な点があり、筆者も二、三年テキストとして使用したが、以後は長井文法を使用することとしていた。ところが昨年夏、韓国ソウルの東国大学校創立七十周年記念「世界佛教学術会議」に出席した際、たまたま佐々木現順教授よりパーリ語文法出版計画のお話を聞き、その出版を待ちこがれていたところ、本年度の開講を前にして出版されたので、早速、パーリ語の授業にテキストとして使用させていただいた。佐々木教授は筆者の恩師であるが、いま求められるままに失礼をも顧みずに、思いつくままの感想を述べさせていただこうと思う。

本書は序文において述べられるように、次の諸点に考慮が払われている。

1、語学研究のための文法書としては、まず簡潔な文法書が必要である。この目的のため、本書は最も簡潔であることを旨とした。

2、サンسكريットと合わせて学習するものを考慮して、各種の変化や文法的法則をなるべくサンسكريット文法と関連させ初歩的学習者の便宜を図った。

3、インド古典語の特色について、いくらかの実例を挙げた。例えば見落されていた重要な接頭辞や接尾辞の分析も追加して、専門的研究への指標とした。

右のように簡潔を旨としていることが本文法書著作にあたって第一の方針であったことが窺え、それがそのまま本書の特色となつてあらわれている。

内容は次のような構成になっている。

第一章 パーリ語の字母

第二章 連声・同化

第三章 名詞・形容詞

第四章 代名詞

人称代名詞、指示代名詞、関係代名詞、疑問代名詞、不定代名詞、代名詞的形容詞

第五章 数詞

第六章 動詞

概説、動詞の活用、現在組織、アオリスト組織、

完了組織、未来組織、受動調、状況調、使役動詞、その他の動詞相、連統体、不定詞、分詞

第七章 派生語

接頭辞、接尾辞

第八章 不変詞

副詞、接統詞、感嘆詞、前置詞、不変化詞

第九章 六合釈

第十章 格の用法

付録 I 梵巴声音変化対照表

付録 II パーリ語諸書体

まず個々の問題点から触れていきたい。文法的に一番の特色は、動詞をサンسكريットと同じく十種に分類していることである。従来のパーリ語文法書のはほとんどは、西紀前三世紀の文法家、Kaccāyana のパーリ語文典に従って七種（ただし *Moggallāna S* パーリ語文典では七種のうちの第五種を二分して全体として八種に分類する）に分類している。ところで *W. Geiger* の文典は十種に分類しているのである。ここで七種の分類法と十種のそれとを比較すると次のようになる。

水野文法も七種の分類法に従っているが、そこでは十種分類法の第六種、第二種、第三種は第一種動詞の中へ併合して、語基構成法に四通りのものがあるとして説明されている。したがって文法的にはいずれでもよいわけであるが、本書が「サンسكريットを併せて学習するものを考慮に入れてサンسكريットと同じように十種に分けて示すことにした」と述べられるよう

十種の類	現在語基構成法	七種の類
I	1 語根 + a 語根の母音→重音半母音	1
	4 語根 + ya	3
	6 語根 + a	
	10 語根 + aya	7
II	2 語根のまま	
	3 語根 + a 疊音變化	
	5 語根 + ṇu (ṇā)	4
	7 語根の最後の子音の前に抑制音を挿入 + a	2
	8 語根 + u	6
	9 語根 + nā (ṇā)	5

に、この方が学習者には確かに混乱を招くこともなく、親切な方法であろう。

サンスクリットにしろ、パーリ語にしろ、アオリストは最も難解なものの一つである。いままでのパーリ語文法は、アオリストを三種に分けるのが多いようであり、水野文法もそれに従っている。しかし本書では Geiger の分類に従って四種に分類している。この両者を比較すると、次のようになる。

水野博士は「厳密には Geiger の如く第一種を二つに区別すべきであるけれども類似の形が多いため、今はこれを区別しなかった」と述べておられるが、両者を較べるとやはり初歩的学習者に重きを置くのであれば、本書のように区別して示してある方が有難い。

四種の分類	三種の分類
語根 aorist } 第一類	a-aorist
語基 aorist }	根 aorist
	不定過去
s.-aorist — 第三類	s-aorist
iṣ.-aorist — 第二類	siṣ-aorist
	iṣ-aorist

でも、サンスクリットやパーリ語では好んで用いられ、この用法を適確に把握しないことには、文章を正しく理解できないものであるが、その構成法を説明するのみで、その用法についての説明も最少限はほしいところであった。

六合釈は、サンスクリット、パーリ語文法における難関の一つであって、六合釈を理解できれば、その大半をマスターしたことになる。とさえ言われ、訳し方も必ずしも一通りに限定されるべきものでもなく、文章の前後関係より判断しなければならぬ場合も少なくない。本書における六合釈の章は用例もかなりあげられていて比較的詳しく説明されているのであるが、唯一つ気になることがある。それは有財釈のところだ。「i, i, i, i, i で終る男性・中性の有財釈は、たびたび \bar{y} が付される」として

bahuyo nadiyo yasmin so = bahunadiko (deso)

つぎに動詞の章全体にわたって感ずるところであるが、用例が極めて稀にしか挙げられていないことである。これも簡潔を旨とする方針の一環かも知れないが、とくに願望法 (optative)、のごとく用法が多様を極め、日本人にとってそのニュアンスを把握することがむづかしい法などはとくにその必要性を痛感する。また分詞について

なる用例が出ている。この場合 *nadi* (河) は女性名詞であるから「男性・中性の有財釈は……」という説明文と矛盾することとなる。この説明文ならば用例においても男性かまたは中性名詞による有財釈を出さねばならないことになるであろう。しかし用例に女性名詞の有財釈が出ているごとく、必ずしも男性・中性に限定されるべきものではなく、実際は女性名詞の場合もあり得る。またこの場合に付される接尾辞は単に *-ka* とするよりも、*-ika* または *-uka* とする方がより適切なのではなからうか。さらに「*i, i, u, u* で終る……」とあるが、この外に *fat* で終る語に *-ika, -uka* の語が付される場合もある。例えば *matā+matā=matamātuko* 死せる母を有する (子) = 母が死んだ (子)

のごとくである。勿論 *fat* で終る語の場合は少ないけれども、やはり例がある以上、あげておくべきであろう。

つぎに格の用法は一般的用法はともかくとして、特殊な用法は日本人にとって理解しにくいところである。しかし本書ではそれぞれの格について、幾通りもの用法と用例が示されていて、初歩的学習者にとっては大変親切である。しかし独立於格 (Locative Absolute) と独立属格 (Genitive Absolute) については、如何なる形が独立於格であり、独立属格であるかの説明がない。例えば独立於格の場合

名詞 (または形容詞、代名詞) の於格 + 分詞の於格の形で両者、性、数においても一致し、原因、讓歩、時、反意、条件などを表わす副文的役割を果す。

とても説明すれば判りよいのではなかったかと考える。

巻末には付録として「梵巴声音変化対照表」が付されている。従来より梵巴の文法は基本的に共通していることは周知の事実であるが、その顕著な差異は語彙の発音・綴字方法にあった。両言語を多少なりとも学習したものにとっては、その差異に気付くが、部分的に確認しているのみで、その全貌は知り難かった。このことについては水野文法では約二十頁を費して説明され、雲井辞典には巻末にこれを表にして出されているが、このような表は音の転化、同化、異化などを一目瞭然にして知ることができ、梵巴両語を併習する場合、表音上から両言語の間に設けられている壁を取り除くことのできるものとして、有意義である。

以上、個々の点について気付いたところを述べて来たのであるが、次に全体としての感想を述べてみよう。

パーリ語は、完全な文法を誇るサンسكريットと異って、文法に完全さがないだけに多くの特例が見出される。それ故、公約数的用例は勿論のこと、同時に少なくとも代表的な特例をあげることが望ましい。ところが本書を全体的に見て、特例のみならず、一般的用例も少ないのは簡潔をモットーとしたためであろうが、最少限の用例は、やはり出してほしいところである。

しかし見方を変えれば、本書はパーリ語の授業の教科書として作られたということが著者の第一の意図であったと考えられる。教授者はこのテキストを骨として、そこへさらに詳しい説明を加え、用例を示し、練習問題を課すなどの肉付けをするこ

とが必要である。学習者はそれによって単に受動的な学習に止まらず、能動的な学習が可能となるであろう。すなわち学習者は、この書に自由に書き込み、各自の学習によって、独自の文法書を作りあげることができる。この意味で本書は学習者側の主体性に期待を込めた文法書と言えよう。本書の特色の一つとして行間が広く、余白の多いことも、そうしたことを考慮に入れていることであるとするとすれば、先に述べた批判は氷解することとなるであろう。

さらにもう一つの利点は、簡潔にまとめられ、しかも読み易いために、パーリ語諸研究者でも、文法辞典として常に座右に置いて活用出来る便利さをもっている。
このような点で、まことに好適なパーリ語文典であり、その出版に敬意を捧げるものである。

(昭和五十二年二月 清水弘文堂刊 A5版 一、五〇〇円)